

社長「先刻申したる通り目下考慮中故其れ以上何んども云へぬ

委員「其れにては致方もなし其通り全體に通すべし

其れを聞き如何なる舉に出づるか私共の責任では無きも若し意外の事あれば誠に不幸の事なり敢て強迫するにあらず結局私等の主張は容れらざる事と思ふ

社長「然らず先刻申したる通り考へて居るなり考へ違ひなき様ありたし

委員「然れば一同に此事を通すべし

社長「萬望無漏私の意志のある處を充分に報告ありたし要するに今日の話しは單り諸子のみならず見らるゝ通り新聞記者諸君にも態々來社を乞ひたる次第は嘆願書は當社よりも早く新聞社へ廻されたりとのこと故皆様に御足勞を願ひ一堂の下に會合して能く私の精神の在る處並に諸子の意志の存する所を聞いて御貰ひし公平なる判斷を仰がんとこの趣旨なれば私の意中を宜しく斟酌して互に誤解なからんとを希望す

松方社長對職工側委員第二回會見顛末

(九月廿五日午後四時五十分開始||同午後六時十分終了)

委員「この間お願ひをいたしました事に付まして今一度お話を伺いたいと存じまして参りました私共は社長さんを眞の親の如く思ふて居りますので今日は……

社長「……一寸待て、今日お前方に會ふ前に聽いて置きたい事がある、今日は先日と同じやうに工場長も、伍長も來てゐるのだらうな……、事が間違つたら不可んから……今日は随分問題になつてゐるから不都合のないやうに新聞記者の偉らい方も見てゐる……先達てお前方から嘆願書が出たから俺は返答して置いたが、あの時はお前だつたかね「社長は全然拒絶ですな」と云ふたのは……あの返事は何う云ふ風にお前達の仲間に報告してくれたか、其の報告の模様を聽いて見たいかね。俺は必ず此處にお前方が並んだのぢやから返答が……報告があると思ふ。重立つた仲間へ報告は何うしたね、其有様を聽いて置くと餘程参考になるだらう……」

委員「エ、……條項の第一條につき八時間労働を原則として考慮中であつて。第二、第三第四の問題は先づ大體に於て聽き容れられたものと思ひまして……其時に一般の者が不安の念を懷いて居り早く様子を知りたいと苦しんで居るものですから、紙に書いて配布りました、五六枚……」

社長「五六枚……、お前の處では何人居るかね……」

委員「約八百人位です」

社長「夫れに五六枚……、次にお前さんの方は何んど報告してくれたね」

委員「私は旋盤工場でありますが、實行委員の人々がありますから其實行委員の人の手から
〔聞通知するやうに申しました〕

社長「通知したか、せぬか判らないな」

委員「通知した事と思ひます」

社長「次にお前さんの方は……、今日は皆んな一々聴くぞ」

委員「私共の方でも大體さう云ふ風に話を申しました」

社長「お前さんの方は如何云ふ風にしたね」

委員「私は木工の方であります、實行委員の責任上私は必ず報告する事だと信じて居りま
す」

社長「さう信じて居るので通知したか、しないか判らないね」

委員「私は實行委員の責任上傳へてくれたものと信じます、實行委員の責任として必ず傳へ
た事と信じます」

社長「お前の方もさうかね……」

委員「私は組立工場であります(雑音低聲聞取れず)〔傳へられて居りました〕

社長「お前さんも」

(此間二三一人時に發言するものありて聴取し難し)

社長「……お前さんだつたかね、五人家族論をした人は……さうだつたね其次の……お前さ
んは」

委員「組立の運搬工で御座います、やはり同じ事で御座います」

委員「組立工場の一般から代表されて、實行委員百名の中から選抜されて來た者で御座いま
す、皆一切諒解の行くやうに、こちらは自分の責任上全う報告して(數字不聽)假に其實
行委員から……職工皆んなに合點の行くやうに云ふてくれと云ふので全部へ知らしまし
た、それでもまだ不安と思ひましたから(二三語不聽)聽いた處が判りました、併しなが
ら第一項(二三語不明)聽かんと云ふ(以下五六語不明)

社長「お前さんは」

委員「私は先程申しました」

社長「今日は餘程形勢が變つたな……お前さんは何處」

委員「私は旋盤の方です」

社長「そちらは」

委員「私は造機旋盤です」

社長「お前さんは」

委員「鍊鐵工場です」

社長「次は」

委員「製罐工場です、實行委員に徹底するやうに……」

社長「お前さんは」

委員「(二三語不聽)で御座います雜工(?)と(三四語不聽)實行委員によく徹底するやうに云ふてくれるやう申し傳へました」

社長「お前さんは」

委員「リベツト、カヌメで御座います」

社長「お前さんは」

委員「第二機械工場で社長さんに會見するのは今日が初めて、御座います」

社長「其次は」

委員「私も委員に傳へました、社長さんの云はれた事を傳へました」

社長「次は」

委員「模型(?)工場で今日が初めて、御座います」

社長「其次は」

委員「旋盤工場で御座います」

社長「そしてお前方がよく通じた後で皆んな仕事を止めやうと云ふ事になつたのか、それと

も又初めから其方針であつたのか、それを俺は聴きたいがね、其邊の事をだね……熟慮の上此怠業になつたのかと云ふ事を一寸聴きたいがね、(暫く双方無言)

委員「私は造機の組立工場(?)へ(二三語不聽)休憩時間に……」

社長「一寸待て、休憩時間とかいふのは……何時頃じやつたね」

委員「十二時七分位で……」

社長「十二時七分なら休憩時間と違ひはせんか」

委員「イヤ私が間違ひました取消します」(此時三四人發言する者ありて不明)

社長「まあ待て、ドウも俺はさう思ふけれども、親の心子知らずでね……」

委員「……それから私が歸りますと待つて居る、茲に於て會見の報告がありました其以後に怠業が始まりました」

社長「怠業をせよと云ふた者が居るのだらう」

委員「そんな者は居りません(委員中發言する者多く中には斷じてありません、誓ひます等の語を發する者ありて暫らく聴き取り難し)

社長「お前は怠業するかと云つたら其時左様な(此時委員中より四五人發言する者あり中に「違ひます」と云ふ委員あり)俺がお前方の條件第一を採用しない意見を簡單に言はう……お前方の理由とする處は……あれは生活難で困ると云ふのである茲にある書類を見るに上の人も下の人も同じやうに賃金を上げよと云ふのである、第一に意見の違ふ所は此

かい、俺は友愛會を排斥などするものぢやない……颯波お前にも此事は話したと思ふがなア……」

颯波(工場長)「聴きました」

社長「俺は此中から怪我人を出したくないのぢや、此の中から怪我人の出ない事を非常に祈つてゐるのぢや、又お前達がこんな事をしてくれて萬一生活に困つて居るやうな者が出来たら俺は眞個に心配するんだ、俺はお前達を信じ切つてゐるのぢや、お前も俺を親と思ふて居りますと云ふ位なら、まアさう窮窟にならず話をしやうぢやないか、俺は先達でも云ふた通り一人でも氣の毒な人があれば相當の事をしたいと常々から思ふてゐるのぢや、それに今度の事件などを仕出來して世間を騒がし新聞記者の方へもお氣の毒の事ぢや、皆さんは世間に通信をさるゝのが任務であるが今度は大變に世間に心配をかけて居るやうな次第で……お前方は伍長心得とか皆古い者許りだから注意をしてくれるのがほんどぢやないか」

委員「さういふた事もありましたが……」

社長「注意をしてくれたのなら誠に良い心掛ぢや……」

委員「殊に眞鍮のやうなものなどは皆んな箱に納めて間違ひのないやうにした工場もあります、社長も工場を御覽になりましたか知らんが……」

社長「俺は殊更に工場へは行かんのぢや、若し行つて皆んなの働かん處を見たら、何うにか

しなくちやならん、さう云ふ譯で殊更に行かなかつたのぢや、判るだらう」

委員「エー、要するに第一項のお願ひでありまして、究竟生活難の救済で御座いますが、何んとか此處で御返事を頂きたいと思ふので御座いますが……」

社長「前にも云ふた通り今の状態では迎も俺の眞意が判つてゐない、俺は俺の考へがある、今も言ふた通りお前方のやり方は不可ない、採用しない、ト云ふのはこれはお前方のみならず日本の労働者の爲めにも決して好い事ぢやない、つまりお前方の最終の利益(七八語不聴)増給しなければならんと調べつゝあるのだ(五六語不聴)近いうちに其方法を執らうと考へてゐるのだ、然るにお前達が勝手なことを云ふて……俺とお前達と意見が一致しないんだから……」

委員「一寸社長さん、新聞記事で御座いますかね、あれにつきまして、社長さんのお話を見ますと社長さんに告げる(以下數語不明)」

社長「お前達がさう聯合して斯んな事をやるやうなれば或は要求は容れないかも知れん、外の工場へやるかも知れん……」

委員「皆も色々心配して居るので御座いますから、八時間勤務にしても、或は歩増しにしても殘業にしましても(三四語不明)満足するかしないかは知りませんが……問題は別になつて居りますから工場の職工にもよく通じまして……」

社長「澤山の人々が五六枚位ではとても判るまいぢやないか」

委員「モット徹底的に通知するやうに致します」

社長「こんな勘違をして呉れて日本労働者の爲になると思ふか、巧く解決が出来ると思ふか俺は度々繰返す通りお前方の敵ぢやない、夫だけは茲に斷言する、然るにお前達は世界的に卑劣と云はれてゐるサポターヂユなどをして、情ない、世界ではサポターヂユに同情する人は一人もない、サポターヂユをやる位なら男らしくストライキをせよ、そしてするならば俺が一番に工場長や伍長に話をしてやるさ、ハ、ハ、ハ、ハ、ストライキは世間に同情がある、同情を得ると得んとは非常な相違ぢや、お前等がストライキを採らずにサポターヂユを採つた事は誠に遺憾である、會社の遣り方が悪いと云ふて自分は會社に出ながら仕事をせず……それでは餘り無理な註文ぢやないかね……」

委員「何んとか確定したお言葉を吾々に下さいとお願するので御座います」

社長「俺はお前達に俺を信頼せよと云ふのだ、俺はお前達と意見が違ふかも知れんが、此前にも増給すると云ふので夫れを宣言して相違なく實行した、未だ會て宣言を無にした事は無い、それでもお前達は俺を信用せぬと云ふのならば仕方がない、信用するとせぬとは其人々に依つて違ふのぢやからな……又俺としてはお前方を信用しない、何故ならば此の大事件を惹き起すやうなことをして置いて、單に通知したものと信じますとか、通知するやうにして置きましたなどいふのは餘りに誠意がなさ過ぎる、或は此サポターヂユをやらした者が、あるのぢやないかね……ドウぢや、無いかね……野倉……お前は皆

がお前を親方々々と云ふさうぢやが、お前は友愛會に入會つて居るのかい……」

委員「入會つて居ります」

社長「友愛會も結構ぢや、決して友愛會を敵に取るのぢやない……」

委員「併し友愛會の役員は約一割か二割しかないと思ひます」

社長「お前も友愛會かい」

委員「さうです」

社長「お前は」

委員「違ひます」

社長「お前は」

委員「會員であります」

社長「お前は」

委員「あります」

社長「お前は」

委員「あります」

社長「ハ、さうすると一割や二割では……」

委員「社長、それは違ひます、私達の云ふたのは役員の事を申したのです」

社長「ハ、さうか……兎に角俺を信じてくれ、確か米が五十三錢になつた時だつたと思ふ、

これは大變と思つて直ぐ其日に増給した、そして七月十五日午後だと思ふ、十六日の勘定からやれと云ふた、それから七月二十二日に之れはとても又増給せんければ不可んからと考へたからドウか皆調べてくれと言ひ渡し下調に奔走して居るそれに今度こんな事を仕出來してくれて俺は天下公衆に向つて誠に濟まん事をしたと云ふ感じを持つてゐる、今日も一部の人からお尋ね下さつた時にも實に恐縮したのちや、併し決して俺はお前方を憎んでは居ない、無論敵だなどとは思つてゐない……」

委員そこで御座います社長が其れほど思つて下さつてゐるのにつきましては何んどか少し確かな事を聴かして頂きたいのです」

社長お前方の行動は間違つてゐる、さうちや無からうか、俺の言葉を信用せず、天下を騒がしてゐるのちやものね……俺などは當然の事をしたものは考へてはゐない」

委員今まで職工は會社の爲にどのくらゐ努力したと云ふ事を社長はよく諒解して下さつてゐるのですか」

社長「エ、もう居るどころぢやない」

委員其職工が今日生活難の爲め非常な苦しみをして居る事を御推察下さつたなら……私達はその事を嘆願したのですが、其事につきまして社長から確なお言葉を聴かして下さつたなら定めし斯んな間違ひは起らなかつたかと思ひます」

社長最初からお前達がサポターヂユをやらうといふ方針でやつたのぢやないかね」

委員「サポターヂユの方針では無かつたのであります」

社長「誰だつたか、此前そんな事を云ふた者があるやうに思ふが……」

委員「そんな事を言つた者は一人もありません」

社長「野倉……お前もさう思ふかね(二三人發言する者ありて聴取し難し)」

社長「お前達はさう思ふかも知れんが俺は確か聞いたやうに思ふ後になつて兎や角云ふのは不可ないから今日は速記者を頼んである、あの時は概要を筆記したものであるから間違つて問題になつては不可ないから出さずに置くが……(數語不明)」

委員「初めからそんな事をやる心算なら何も社長さんに嘆願するやうな事はしません……社長さんは充分部下に同情を持つてゐられるからと信じてお願したのです、ですから職工一同が満足する爲に何にか確かな事を聴きたいのです確かな言葉を聞きましたら一同が満足するだらうと思ひます」

社長「返答もだが明日からも尙ほ引續いてサポターヂユを續けて居つたら始末が出來ない」

委員「私共は責任を持つて居ります、秩序を保つ事もして居ります(此間雑音不明)満足なるお言葉を聞きましたら自分達は勿論職工一同働かぬと云ふやうな者は一人もないと信じます、今は皆一樣に不安を感じて非常に待つてゐるのですから私共の身になつて見ますると何とか報告をしなければならぬのであります」

社長「お前方に聞くがね、先達の拂日に金を集めたさうだが、あれは何んど思ふて集めたの

かね」

委員「それは集めました、其金は実行委員百名の内(雑音數語不明)各工場に保管してあります萬一の事がありました時に……即ち萬一犠牲者でもありました時に……收監された時とか、其他間違の起つた時とかに救済する考へで……自分の運搬工の方でも十九日夜各自一日分の金を徴收した譯であります」

社長「マア皆んな、煙草でも喫めよ喫みながら話をしやうではないか」

委員「組合の中で若しも作業中に過つて怪俄するとか病人でも出来るとか又は一週間以上休業した時に本人に對し……又今度のやうな要求を提出して此際怪俄でもした時に其者を救済する心算でもつて……」

社長「お前の方だつたかな、十二年も勤めて居て賞與を貰はん者のあるのは」

委員「私の方ですか、ハイ十二年になりますはまだ賞與を貰はぬ人があります」

社長「お前は何年居るね」

委員「私は足掛六年居ります」

社長「お前は何年目に伍長心得になつたかね」

委員「四年目だと思ひます」

社長「さうか、一方の者はドウだ、よく勉強して働くかね」

委員「自分より六七年前に来てゐるのでありますから私の來るまでのことは知りませんが聊

か怠けるといふ風はあります、併し今日では精勤して居ります」

社長「さうか、それは結構ぢや、併し能く考へて見よ、お前の言ふ通り怠ける者にはドウも賞與をやれんではないか、何んぞかしてやりたくも、仕事を怠ける者には何うもしてやり方が無いぢやないか、そこはお前達も能く考へなければ不可ない、今度でもその通り功勞のある人達にはやると云ふ事になつて居るんだ、其邊を聞分けて明日から仕事をしたら如何か」

委員「今日中にでも會社の方で出来るやうにして頂けばするのであります、つまり仕事をします前に成るべく之れを(雑音數語不明)……物價も益々騰貴して居りますから(數語不明)何とか誠意ある御回答に接しません以上はやれないと申して居ります(以下雑音聽き取り難し)」

社長「よし、お前は小供を持つてゐるかね」

委員「持つて居ります」

社長「お前も持つてゐるか」

委員「持つて居ります」

社長「お前達は俺を親ぢやと云ふ、俺はお前達を小供と思ふ、俺は夫だけお前達を眞個の道に立歸らしてやらうと思ふのだ、之れをやらうと思へば何時かやるよ之は可愛いからやるの惜いからやらぬのと云ふ譯でないのぢや、俺の立場も少し考へて見てくれ、お前方

の立場からすると社長は不親切や不誠實ちやと思ふだらうが小供が身體の具合の悪いのに饅頭をやらうと云つて夫れを喰はしたら忽ち胃を損ねて益々身體を悪くすることになるだらう、夫れと同じやうに俺はお前方が非常に可愛い、だからその身體の悪い小供には先づ治るまでやれんぢやないか、働けよまア俺を親と思ふてるのなら信じてくれよ
委員「社長さん、私はさうは思ひません、小供が駄々を捏ねれば私は先づ其れを喜ばす爲に或るものを與へ、而して後初めて仕事をさせやうとするのであります、さうすると小供は喜んで仕事をやります」

社長「所がそれは不可ん、菓子を呉れたら悪いと知りながら其れをやるのは却て非常に不親切なやり方だ」

委員「然し社長さん、私は前にも申しました通り先づ働きたい者にはそれが出来るやうな言葉を下さしまして其後の働きを見たら好からうと思ひます、それで私共は常に働く者の交渉委員となつて……」

社長「お前何とか云つたな、青柿か……何處だつたかね」

委員「(一語不明)工場であります……只今社長さんの言はれました處によりますと皆一生懸命に仕事をやれ、仕事をやつたら社長さんはヨリ以上の事を……」

社長「待つてくれ、ヨリ以上の事とは……」

委員「今日まで一生懸命に仕事をやつてゐる者が社長のお目には留りませんのですか」

社長「イヤそんな事はない」

委員「社長さんの方でも吾々に對し幾何か賃金を上げてやらうと思はれて居るのですか」

社長「そんな事は云はん方が好い、お前達の働きやうが判らぬ事はないのだから其の働き振りに依つて俺に考へがある、兎も角も働くに限るよ」

委員「社長さん、一寸申します、十五日の正午(雑音數語不明)吾々は矢張り充分に仕事をしなかつたと思はれるんですか又は充分に仕事をしたものと思はれるんでせうか社長さんはドウ云ふ風に思つてゐられるのでせう」

社長「俺は今日が今日でもお前達が仕事をしてくれる事を望むのである」

委員「社長さん一寸待つて下さい、十五日までの事を云ふのです……あれまでのやうな状態なら貴方は増給をしてやらうと云ふやうな口吻で御座いましたから其事を一同に傳へやうと思ふの下(雑音不明)早く云ふたが好いと思ひまして部長さんの手許まで嘆願書を提出した次第であります」

社長「二圓の者に七割増給して更に五割の歩増しをせよといふのだから都合五圓十錢になる譯だが曩に米が五十三錢になつたときに給料を一割引上げたことをお前達は知つて居たらう、一割ならば左程でもないが五割と云ふと、お前達は機械のダイヤメーターを見ても判るだらう大きな違ひぢや、それに十八日朝嘆願書が俺の手元に届いてお前方と會見したばかりなのに即日正午までに回答せよといふ、そんなことが出来るか出来ぬか一寸

考へても判るぢやないか、だからお前方も歸つて仕事をした方が好くはないか」
 委員「社長さんはさう云はれますが吾々はお土産なしに歸つて只仕事をせよと傳へる事は誠に辛くて此の場合逆も出来ないであります」

社長「お前達は俺を信用せよ、信用しなくちや不可ん、情ない事には一般社會でも斯んな最も卑劣な事をやつて……併し乍ら誰かお前達に斯うせよとサボターヂユを教へた者があるのだらう、これは佛蘭西語のサボターヂと云ふてね千八百九十年に南歐洲で行つた事あるが之は歐洲では大變に卑劣な行爲として人々から排斥されて居るのである、これは全く不可んやり方ぢや」

委員「私達は決して好んでやるものではありませんが日本の法律ではストライキをする事が出来ないうやうになつて居りますから」

社長「お前方が考へて見てもお前方自身の責任の輕くないことが判るだらう、夫故何うか工場に歸つてお前方が皆の先になつて仕事をやつてくれ、さうしてア、一時の過ちであつたと皆が悟つて働いたなら俺にも亦考へがあるのぢや、ドウでも斯うせよなどゝ無理なことを言はずになア俺の身にもなつて見てくれよ、頼むぞ、俺もお前達の身になつて考へてやるんだからな」

委員「充分諒解しましたが、さうすると社長は……」
 社長「大丈夫……」

委員「吾々の報告が(雑音不明)」

社長「モウ大抵俺の意のある處を察したらうと思ふから今日は之れで止めてお前達は皆の者の先に立つて仕事をやつて見たらドウかね」

委員「解りました、働きます、此事を充分徹底するやうに申しましてから働きます」

委員「充分に通じる事を致します、飽までも意志の徹底を努めますが……」

社長「夫れが物の順序ぢやよ、明日の朝になつたらどれくらゐ働いて居るか云ふ事を俺に見せてくれ」

委員「それでは何んで御座いますか今日は吾々の主張が充分にお判りになり又皆が仕事をするやうになりましたら社長がお言葉を下さいますと通ずる……一日も早く……」

社長「充分に働くんだ、お前達も諒解してくれ、俺もお前達の云ふ事は判つてゐる」

委員「其旨を通じまして一生懸命に仕事をしましてその曉には社長さんが何んどか方法を講じて下さるんで御座いますな」

社長「さうなくとも仕やうと思へばするんだ、好いか今度の事なども俺がチャンと考へてゐるのにお前達が茶々を入れたんぢやないか、判るかい、茶々を入れて置いて色んなことをする、マア篤と考へて見るがいよ」

委員「諒解しました」

社長「さうだ、諒解してくれ、何んどかしてやらうよ、判つたかね」

委員判りました」

委員此事を一應通じまして仕事をやるやうに努めます」

社長判つてくれて結構ぢや、それではマー同じ事を繰返すやうなもので皆の人にも御迷惑

ぢやから好い加減に話を止さう」

委員同じ事ですよく皆の者に通じる事にいたします」

社長併し一寸附け加へて置きたいのは特別賞與のことである、之に就ては俺の方でも色々
と心配して居たものであるが斯う云ふ事は人事の事で誰でも多數で出来るものでない殊
に田中(取締役)さんなどは社用を以て二度まで西伯利亚に行かれ之が爲に調査も自然延
びたけれど夫でも歸來常務を執られる以外に多分の時間を割て熱心に調査の歩を進めら
れ又坂(取締役)さんもお前達の知つてゐる通り怪俄をされて手に縋帯をせられ若し其手
を垂れたら血が下るといふ不自由な容態なるにも拘らずお前達の爲を思ふて調査に盡力
せられたやうな次第で、其の結果漸く阪さんの方は八月末、田中さんの方は九月の初め
に俺の手許へ廻つたやうな次第で、俺も無論其事に就て充分調査を急いでゐるから此點
は皆諒として貰ひたい」

委員よく判つて居ります……」

社長夫れから今一つ云ふて置くが現に實行して居る臨時手當も所員の方は此前本給に繰入
れたんだ一旦附けた手當をどんな事情があつても今更取消すなどの事は出来るものぢや

ない、それは官廳でも會社でも同じ事ぢや、其位の事は俺にもよく判つてゐるよ、お前
達の方も繰込まうとは思つたが當時之を繰込めば必ず後に世間で附ける時分になつて又
其上にも望んで来るぢやらうと思つてゐたから繰込まずに置いた處が……案の定云ふて
來たぢやないか、丁度俺の思ふ通りだ……」(以下雜談省略)